

歐陽脩の文學論における「理」

——詩話を中心として——

北宋における文化の指導者推進者として、多方面にわたって新たな分野を開拓した歐陽脩(1007—1072)は、文學史的には、詩の隨筆評論「詩話」⁽¹⁾を初めて世に出した人としても知られている。

その『詩話』中、彼は、文學上の同志として常に敬愛の念を抱いていた友人、梅堯臣の、

○詩家雖率意、而造語亦難。若意新語工、得前人所未道者、斯爲善也。

○詩句義理雖通、語涉淺俗而可笑者、亦其病也。

という二つの詩説を紹介している。が、自らはこの説に對して全面的には贊同しかねたものと見え、同じ『詩話』の中で、

増 子 和 男

○詩人貪求好句而理有不通、亦病也。

と述べ、唐・張繼の詩「楓橋夜泊」を例にあげて、次のようにこれを評している。

○唐人有云、姑蘇臺下寒山寺、半夜鐘聲到客船。說者亦云、句則佳矣。其如三更不是打鐘時。

この一節は、宋人が、文學作品の評價基準として「理」「義理」を好んで用いたことを示す例としてしばしば引用されるものである。ところが、從來、宋人にこうした傾向があるという指摘は何人かの人々によって爲されはしても、その文學

論で稱する「理」「義理」がいかなる性質をもつものであるか述べられることは、あまりなかったように思われる。小稿では、この問題を考える手は、はじめとして、詩話の創始者であり、かつ後世に大きな影響を與えた存在という意味から、歐陽脩の説く「理」「義理」の特色を見ることとしたい。

(一)

まず、歐陽脩の説く、「理」「義理」の特色を明らかにするために、先行する文學論における「理」「義理」の扱われ方を概観しておく。中國文學史上、最初の文學論の專著として知られる魏・曹丕の「典論 論文」以下、特徴的發言を拾つてみると次のようになる。(傍點は引用者)

(1) 魏・晉

○夫文同而未異。蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尙實、詩賦欲麗。(典論 論文)⁽³⁾

○理扶質以立幹、文垂條而結繁(李善注)言文之體、必須以理爲本(晉・陸機「文賦」)⁽⁴⁾

○夫假象過大、則與類相違。逸辭過壯、則與事相違。辯言過理、則與義相失。麗靡過美、則與情相悖(晉・摯虞「文

歐陽脩の文學論における「理」(増子)

章流別論⁽⁵⁾

(2) 六朝

○夸過其理、則名實兩乖(梁・劉勰「文心雕龍」卷八・夸飾)⁽⁶⁾

○永嘉時、貴黃老、稍尙虛談。於時篇什、理過其辭、淡乎寡味(梁・鍾嶸「詩品」序)⁽⁷⁾

○論則析理精微、銘則序事清潤(梁・蕭統「文選」序)

(3) 北朝

○自昔聖達之作、賢哲之書、莫不統理(北齊・魏收「後魏書」文苑傳序)⁽⁸⁾

○今世相承、趨末棄本、率多浮艷。辭與理競、辭勝而理伏(北齊・顏之推「顏氏家訓」卷上・文章篇)

(4) 隋・唐

○言文而不及理、是天下無文也(隋・王通「文中子 中說」卷十・王道篇)

○氣質、則理勝其詞。清綺、則文過其意。理深者便於時用。文華者宜於詠歌。此其南北詞人得失之大較也(唐・李延壽「北史」文苑傳序)

○其理也貴當、其辭也欲巧(唐・令狐德棻「周書」卷四十一・王褒・庾信傳論)

○然挈瓶膚受之流、責古人不辨宮商、詞句質素、恥相師範。

於是攻乎異端、妄爲穿鑿、理則不足、言常有餘、都無比興、但貴輕豔（唐・殷璠『河嶽英靈集』序）

○故義深則意遠、意遠則理辯、理辯則氣直、氣直則辭盛、

辭盛則文工（中略）文、理、義、三者兼并、乃能獨立於一時、而不泯滅於後代、能必傳也（唐・李翱『李文公集』

卷六・答朱載言書）

○嘗聞於師曰、尙氣、尙理、有簡、有通。能者得之以四、

不能者失之亦以四（唐・權德輿『權載之文集』卷三十・酷說）

○夫文者非他、言之華者也。其用在通理而已。（中略）以非常之文、通至正之理、是所以不朽也（唐・皇甫湜『皇甫持

正文集』卷四・答李生第二書）

○苟意不先立、止以文彩辭句繞前捧後、是言愈多而理愈亂

（唐・杜牧『樊川文集』卷十三・答莊充書）

これらの例からも、歴代の文學論の中で「理」について發言したのは、歐陽脩、梅堯臣ら宋人が最初ではなく、しかも多數の人々によって、文學作品に缺く事のできぬ大切な要素としてそれがとらえられていたことがわかる。また、各文學論における「理」のおかれている位置を見ると、前記の歐陽脩、梅堯臣が「造語」「好句」等の修辭上の語句と對應する

ものとしてそれを位置づけていたのと同じく、歴代の文學論においても「文」「辭」すなわち修辭に對するものとして「理」が位置づけられていたことが目につく。そして、この「文」「辭」と「理」との関係について見れば、各時代及び各個人によって重んずるところは違つても、兩者の均衡をはかるべきであるとの意見もまた多いようである。

従つて、先にあげた梅堯臣、歐陽脩の「理」に關する發言は、彼らによつて突然述べはじめられたのではなく、文學史上、幾度となく發言されて來たものの延長線上に位置づけられるべきものと見て良いだろう。この點から見ると、後世さかんに指摘される宋人の「理」尊重も、その中心人物のひとりである歐陽脩の發言も、文學批評史上、とりたてて斬新なものでは無いと言つてさしつかえあるまい。

けれども、後世多くの人々によつて宋人、特に歐陽脩の文學論の大きな特徴として、「理」の尊重が指摘されるのは、まずその尊重の度合が問題となるからである。

小稿の冒頭に引用した歐陽脩の言説と、右の歴代の人々の發言とをより詳しく比較検討してみれば、この點が理解されよう。

上掲の史料に明らかのように、歴代の文學論の中で、歐陽

脩と同じく「理」を重要視するものは一、二ではなかった。しかし、多くの文學論では、「理」は勿論大切であるが、同時に「辭」「文」も重要視すべきであると説かれていた。これに對して歐陽脩の場合は、小稿の冒頭に引用した發言のほかに、今日残されている著述を見る限り、「辭」「文」よりも、まず優先すべきものは「理」であり、それ以外、必要ないかのごとき發言が目立つ。

次に問題となるのは「理」が重要視される文學ジャンルである。曹丕の「典論 論文」以下、「理」が最も必要とされる分野を「論」に限定する説や、廣く文學一般における大切な要素として「理」を位置づける説が多數を占める中にあって、ひとり歐陽脩が、詩の必要缺くべからざる要素の第一として「理」をとりあげていることも、その文學論を強く特色づけるものとなっている。歴代の多くの文學論において、詩になくしてはならない第一の要素は、「麗」「美」「華」「艶」であった。それらをおいて、「理」を最も大切な要素だとする見方は、歐陽脩以前、極めてまれだからである。

(二)

このように、文學、特に詩における重要な要素の第一に

歐陽脩の文學論における「理」(増子)

「理」を推した歐陽脩であるが、その言説一般における「理」のとらえ方を次に見ることとしたい。

彼の「理」全體に對する認識が簡潔に述べられているのは、現行の『歐陽文忠公集』では、ちょうど『詩話』の直後に收められている『筆説』中の、次の一段であろう。

○凡物有常理。而推之不可知、聖人所不言也。磁石引針、
螭蛆甘帶、松化虎魄。

「凡物有常理」という發言は、後に著しい隆盛を見せる宋學の先聲となつたものと見ることもできるが、これは、歐陽脩が新たにとなえたものではなく、萬物に理が存するという發想および理を窮めるといふ發想は、ともに古く、『莊子』田子方あたりにも「聖人者、原天地之美、而達萬物之理」(卷七)と見えるものである。

しかし、それよりもまずここで注目しなければならぬのは「而推之不可知者、聖人所不言也」といふ發言である。「理」にてらして知ることのできないものは、萬物の理に達している聖人の言わぬものであるといふ發想は、聖人の言への絶對的尊重を示しているからである。

歐陽脩が「理」にそむくとして批判したものは多方面にわたっているが、特にその思想的背景になった學術における先行諸説に對する批判は著しいものがあり、かつ重要な事柄を我々に示している。中でも有名なのは、

(1) 『新唐書』五行志から、災異應徵を示す記事を排除したこと。

(2) 「論刪去九經正義中讖緯劄子」(奏議集・卷十六)という上奏文を著し、魏晉以來多くの批判者が出ながらも、なお『正義』中に好した讖緯の書の説の全面的否定を説いたこと。

(3) (1)(2)をふまえて、經の古注を批判したこと。

であろう。

試みに、彼の經學に關するまとまった著述として知られ、かつまた、文學論との關連が極めて濃厚と思われる『詩本義』⁽¹⁴⁾について、その具體的な發言の例をさがし、古注批判の動向を見ることにしよう。

○麟之趾

麟の趾^{あし}

振振公子 振々たる公子

于嗟麟兮 ああ麟

○麟之定 麟の定^{よき}

振振公姓 振々たる公姓

于嗟麟兮 ああ麟

○麟之角 麟の角^{つゝ}

振振公族 振々たる公族

于嗟麟兮 ああ麟

(周南・麟之趾)

序および毛傳・鄭箋に従えば、以下のようにならう。「文王の治世、靈獸である麒麟が、その徳に應じて出現した。やがて周の衰えたときも、關雎の化のゆきとどいた周南の地では、文王の教えを守っているために、麒麟が現れたときのように、人々是非禮を犯すことはない」。

従つて、古注によれば、「麟之趾」が作られた時代はともかく、文王の治世に、麒麟が實際に現れたということになるわけである。

これに對して歐陽脩は、「麒麟はあくまでも、ものたえにすぎない。しかるに毛傳、鄭箋ともに詩序にひきずられ

て、いつの時代にせよ、太平の瑞徴として麒麟が出現したなどと稱し、鄭箋に至っては、その形状までも述べている。このように、あたかも靈獸が出現したかのような誤解を招く古注の見解は、『怪妄之説』であり『衍説』である」と批判している。⁽¹⁵⁾

歐陽脩の、このような論の進め方は、今日の我々にも、ある程度納得のゆくものではある。しかし、このように単に「理」にてらして解釋の是非を問うというのでは、今一つ説得力を缺くと彼は考えたものと見え、自らの學術史觀を述べ、それを根據にすることによって、體系的に古注の「理」にそむく點を批判することになる。

彼の學術史觀は、著作中多數散見するが、その概略は次のようになる。⁽¹⁶⁾

- (1) 方孔子時、周衰學廢、先王之道不明、而異端之説並起、
- (2) 孔子患之、乃修正詩書史記、以止紛亂之説、而欲其傳之信也（以上、居士集卷四十三・帝王世次圖序）
- (3) 自孔子歿而周衰、接呼戰國、秦遂焚書、六經於是中絶、
- (4) 漢興蓋久而後出、其散亂磨滅既失其傳、
- (5) 然後、諸儒因得措其異説於閒、如河圖洛書怪妄者（以上、

歐陽脩の文學論における「理」（増子）

居士集卷四十三・廖氏文集序

こうした學術史觀に基づいたものであれば、麒麟の出現をはじめとする災異應徵説は、「非聖人之言」すなわち「理」にそむくものとなり、「荒唐怪誕」⁽¹⁷⁾「恠異之言」⁽¹⁸⁾「恠奇詭僻」⁽¹⁸⁾「詭異」と痛罵されることにならう。

更に彼は、右のような學術史觀に基づき、依據する説の信憑性の序列をも規定している。

例えば、異なつた傳承が一つの事柄に併存した場合には、どれを信賴すべきか、との問いに答えて次のように言う。

○從其人而信之、可也。衆人之説如彼、君子之説如此、則捨衆人而從君子。君子博學而多聞矣。然其傳不能無失也。

君子之説如彼、聖人之説如此、則捨君子而從聖人、此舉世之人皆知其然（居士集卷十八・春秋論上）

すなわち、依據すべき説の第一は、萬物の理に通じた「聖人之説」つまり、經に記されている言説。次いで、時代が下るに従つて「君子之説」（諸子の言説）、「衆人之説」（各經に付せられた傳注および漢代以降の諸儒の言説）と、その信憑

性の序列を下げていつている。そしてこの序列に従い、彼は、徧く前世の訓詁にあたり、それらを論據として古注の理にそむく點を批判し、古注によって曇らされた經の本義を明らかにしようと努めた。

ここには、かなり周到な考證的態度と論理性とが見られ、後世、若干の批判が存するもの、形式としては整い、その論の進め方にも、より説得力が増すこととなり、宋代の人々の學問に對する評價が嚴しいと言われる清人からも、「其所訓釋、徃徃得詩人之本志」という高い評價を受けるに至っている。

このようにして、歐陽脩の古注批判は、萬物の理に通じた「聖人之說」を頂點とした諸説を、序列に従つて論據に用い、それによつて古注の「理」にそむく點を證明するという形式をふむことにより、一應の成功を見た。

それでは、文學論においては、どのようであらうか。

(三)

小稿の冒頭に引用した『詩話』の一節を再び吟味してみたい。

歐陽脩は、畏友梅堯臣の二つの詩説を紹介し、それに、や

や反對するかたちで自らの詩説を述べ、その實例として唐・張繼の「楓橋夜泊」をあげて、「理」にそむく點を指摘していた。

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼いて 霜天に滿つ

江楓漁火對愁眠 江楓漁火 愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外 寒山寺

夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲 客船に到る

この詩で問題となつたのは、後半の二句、とりわけ最後の句であつた。すなわち「夜半鐘聲到客船」とあるが、場所はどこであれ、三更(夜半)は鐘をつくべき時間ではなく、この點において、張繼の詩は「義理」が通じない、というわけである。

『詩話』では、この他にも、批評の對象となつた作品が、「理」「義理」にそむくとして批判した例がいくつも見出されるが、これとは逆の場合、つまり作品を推賞する場合にも、張繼の詩に對するのと極めて良く似た方法をとっている。

例えば、梅堯臣が范仲淹の開いた宴席上作つたと言われる「豚魚詩」(范饒州坐中客語食河豚魚)の、

春洲生芽荻 春岸飛楊花 河豚當是時
 貴不數魚鰕

という一節に對して、次のような評を加えている。

○河豚常出於春暮、羣游水上、食絮而肥、南人多與荻芽爲羹、云最美。(中略) 聖愈平生苦於吟詠、以閑遠古淡爲意、故其構思極難。此詩於罇俎之間、筆力雄贍、頃刻而成、遂爲絕唱。

先に見て來たように、歐陽脩は、右二例を含めて、「理」の通不通を詩評價の第一基準としていたわけであるが、彼は、ただそのみを述べることを以って終えていない。右の例に明らかのように、次に必ず、批評の対象となつた作品が、いかに「理」の通じたものであるか否かを考證を通して證明しようとしている。

こうした形式、あるいは批評態度は、前記『詩本義』における古注批判のそれと、基本的には少しも變るところがない。

歐陽脩が文學論で説く「理」もまた、考證によって、その

陽歐脩の文學論における「理」(増千)

通不通が證明されるべきものであつた。

(四)

前にも觸れたように、歐陽脩は「凡物有常理」と述べて、「理」は萬物に存在するという考えを表明していた。この考え方からすれば、今迄見て來たように、「理」が通じているとかいえないとかということ、わざわざ考證によって證明した彼の方法は、矛盾があるように思われる。しかし、これは歐陽脩の「理」のとらえ方に問題があるのであつて、そのとらえ方からすれば、こうした方法はさほど大きな矛盾とはなるまい。

彼の稱する「理」は、朱熹たちによって唱えられた「理」のごとく萬物を一貫する法則性⁽²⁾とまで意識されていない。萬物に理があると云つても、個體差があると考えたわけであらう。物によっては、理が片寄っていることもあれば、何らかの障害によって、それがとらえ難くなっている場合もある。

あるいは、「萬物の理に通じた」聖人ならざる一般の人々の創作や考案に關わる文學作品や注釋であつてみれば、失敗により、理を失うことも無いわけではあるまい。そうしたものを「理の通じぬもの」としてとらえ、それを考證によって證

明しようとしたのが、歐陽脩の方法であつたと解釋されよう。

この點、自然の法則性、萬物生成の根源として「理」を形而上學的にとらえた、朱熹らの宋學（理學）ほどに、歐陽脩の稱する「理」は熟していない。その考え方、すなわち「凡物有常理」という考え方が、後の宋學の先聲を爲したと見ることはできて、兩者が全く同一と見ることはできない。何となれば、朱熹たちの言う「理」は、ありとあらゆるものを貫く法則性であつて、考證も證明も全く必要としない存在だからである。

では、一體、歐陽脩が文學論等で、考證を通じて證明しようとした「理」の通不通、すなわち「理」が通じているとか、いないとか言うのは、どういう事なのだろうか。

『詩話』をさらに讀むと、次のような一節が目をはひく。

○京師輦轂之下、風物繁富。而士大夫牽於事役、良辰美景、罕或宴遊之樂。其詩至有賣花擔上看桃李、拍酒樓頭聽管弦之句。西京應天禪院有祖宗神御殿、蓋在水北、去河南府十餘里。歲時朝拜、官吏常苦晨興、而留守達官簡貴、每朝罷、公酒三行、不交一言而退。故其詩曰、正夢寐中

行十里、不言語處喫三杯。其語雖淺近、皆兩京之實事也。

ここで問題となるのは、二つのエピソード及び、それにまつわる詩そのものではなく、最後の「其語雖淺近、皆兩京之實事也」という言いまわしである。

この言いまわしは、小稿の冒頭引用した、梅堯臣の「詩句義理雖通、語淺俗而可笑者、亦其病也」という説に對する歐陽脩の「詩人貪求好句而理不通、亦病也」という説と、言い方に多少違いはあつても實によく似たものとなっている。梅堯臣は、たとえ義理が通じていても語は淺俗であつてはならないとし、歐陽脩は、好句を求めあまり、理が通じなくなつてはならないというわけである。この歐陽脩の説を角度を變えて言えば、詩句がたとえ淺俗であつても、義理が通じていさえすれば良いということになり、「語雖淺近、皆兩京實事也」と酷似した言いまわしとなるのである。

これまで例示してきた歐陽脩の詩說等を、この點からさらに檢討を加えれば、その特徴が、より明確にならう。

張繼の「楓橋夜泊」が何故、理の通ぜぬ詩であると評價されたかという、三更すなわち夜半は鐘をつくべき時ではな

い、という一點にあった。『詩經』麟之趾の古注が、理にそむくものであるとされたのも、傳説上の靈獸である麒麟の出現を古注が説いたからであつた。そして、梅堯臣の「豚魚詩」が、いかにすぐれているかについても、その詩句の彫琢のすばらしさを賞讃することよりも、自らの考證と詩句の内容とが、いかに合致しているかということに興味の重點がおかれていた。

これらで述べられた、理の通不通を「實事」(事實)と合致するか否かということにおきかえることは、さほど困難ではあるまい。

三更は、鐘をつくべきときでは無いのに、その音が船まで聞こえて來たというのは事實と合致しない。また、麒麟が想像上の靈獸であるという事實は誰も知るところである。しかも、いつの時代であれ、それが現われたと言うにとどまらず、その姿形さえも説明した古注の解釋は事實に反する。梅堯臣の詩がすぐれているのは、豚魚の獲れる季節を、事實に即してうたっているからである、とならう。

こうした實事尊重を示す言説を、『詩話』では、他にもいくつか載せている。

例えば、彼の尊重した唐の孟郊、賈島のどこに良さがある

歐陽脩の文學論における「理」(増子)

かについて、詩作に生命を賭したことにあるとし、その、詩を究めようとするあまり、窮乏生活を送らざるを得なかった様子を如實にうたった詩をあげて、「人謂、非其身備嘗之、不能道此句」と記し、過酷な現實の裏付けがあつてこそ、そしてそれをありのままに描いたからこそ、その詩がすぐれたものとなつたとしている。

このような傾向は、歐陽脩だけのものではない。詩句と理との關係については、歐陽脩と見解を異にしていた梅堯臣にも「必能難寫之景、如在目前」という發言があり、⁽²⁴⁾彼もまた、詩作にあたっては事實に即す事を心がけるべきだとの意見を有していたことがわかる。

これらの例から見て、歐陽脩が文學論で説く「理」「義理」の通不通とは、詩句内容が、事實と合致しているか否かの別の謂いであることとらえることができる。すなわち、歐陽脩が、詩を評價する上で第一の基準としたのは、詩句の彫琢ではなく、詩句の内容が事實と合致しているか否かということであり、これは、後世指摘される、當時の人々の、文學に對する現實主義、現實至上主義的傾向の一端を示したものである⁽²⁵⁾といふことができる。

(五)

さて、以上のように、歐陽脩が文學評價の第一基準としてあげた「理」「義理」の通不通とは、作品内容が事實と合うか否かの別の謂いであると考えられるわけであるが、こうした傾向には、どのような問題点があるだろうか。

まず第一に問題となるのは、その考證なるものの成果である。

古注批判では、自らの學術史觀に基づき、資料の信憑性に序列を設定し、これらを「驅使」することによって、その解釋がいかに「理」の通ぜぬものであるかを證明しようとしていた。この方法そのものに關しては、後世の人々からも、ある程度以上の評價を受けることができた。體系的な學術史觀の裏付けが、あったがためである。

ところが、詩に關しては、裏付けとなるべき何物もなく、ひたすら批評の對象となつた作品が、いかに「理」「義理」の通じたものであるか否か、すなわちその内容が事實と合致しているか否かを考證するのみである。従つて、その考證が他の考證によつて實に容易に覆されることになる。

前記「楓橋夜泊」批判の唯一の論據となつた、夜半(三更)

は鐘を撞くべき時では無いという考證は、張繼と同じ唐人である皇甫冉の「秋夜嚴維宅」や、陳羽の「梓州與溫商夜別」等の詩に見える記述によつて、誤りであつたことが證明された。また、大いに賞讚した「豚魚詩」の、賞讚の理由づけとして行なつた考證も、浙江、江陰、江西における豚魚の漁期を徹底的に調べあげた、宋の葉夢得によつて、歐陽脩の考證は江西のみ通用するものであり「南人云々」と言う事は不可であるとの批判を受けている。

さらにまた、體系的な學術史觀に裏付けられ、方法としてはある程度の評價を受けていたはずの古注批判に對しても、後世の人々の考證を通じての再批判が待ちうけていた。

周頌「思文」を例に、これを見よう。

○思文后稷 文を思うに后稷

克配彼天 克く彼の天に配す

立我蒸民 我が蒸民を立つる

莫匪爾極 爾の極に匪ざるはなし

○貽我來牟 我に來牟を貽る

帝命率育 帝命じて率育せしむ

無此疆爾界 この疆 爾の界なからん

陳常于時夏 常を時の夏に陳ぶ

(一、二章)

ここで問題とされたのは、「牟」字をいかに解釋するかという事である。古注では、「牟」を「麥」であると解釋したが、歐陽脩は依據不明の一事を以ってこれを一蹴し、『爾雅』『六經』や字書(辭書)を徧く調べた結果、意味不明であるとの結論を下した。

ところが、古注の見解が依據不明であるという歐陽脩の批判に對して異議をと見える者が現われた。南宋の王應麟である。彼は『文選』注に引く『韓詩』に「我に麥(大麥)を貽る」と見えることを指摘し、「毛鄭說、未可以非」と述べた。⁽²⁸⁾更に清代になると、汪啓淑が出て、王應麟の見解を一步進め、古注の考え方は『說文解字』に見えるものと同じであり「牟」は一字として見るべきではなく、むしろ「來牟」二字を一つのものとしてとらえるべきであるとの見解を示している。⁽²⁹⁾

勿論、今日となつては、これらの見解の何れが正しいかについて判断する事は難しいが、いづれにせよ、歐陽脩の古注批判の唯一の證據であつた「出典不明」という見方は全く覆

されたこととなる。

考證を最も得意とした清人は言う。

○蓋攷訂之學、宋儒非全不講、然其疏漏則不可掩、此亦一證。⁽³⁰⁾

このように「理」「義理」の通不通を證明しようとして行われた、歐陽脩の考證の成果は、同じ批評態度を持つ人々によって否定あるいは批判されることになったが、中には彼の説を支持する者と反對する者との間に論争が起り、それが泥沼化して決着がつかねたまま放置される場合も決して少なくはなかつた。⁽³¹⁾しかも、そうした場合、既にその作品の評価そのものは閑却され、考證の當否のみに關心が寄せられているのが特徴的である。これは、こうした批評態度を持つ人の陥り易い傾向であろうが、問題は、このような批評態度をもつ人々が、歐陽脩以降どれほどいたか、ということである。もし、こうした人々が少数であるならば、文學批評の一形式として、時代の流れに埋没してしまい、その影響力もさほど大きな問題とならないのであるが、實際はどうか。

南宋の許顛(字は彥周)は、詩話を定義して次のように述

べている。

○詩話者、辨句法(法)、倫(備)古今盛德異事、正訛誤也
 (彦周詩話)

詩話の定義の一つとして、詩話とは訛誤を正すもの、すなわち詩の内容が實事と合わぬとき、これを正すものであるという考え方は、許顛だけのものではなく、歐陽脩以降、著しい流行を見た宋代の詩話の作者たちの、ほぼ共通した考え方であるとして良からう。というのは、宋人の詩話を集めたものとして今日迄傳えられている、阮閱の『詩話總龜』、胡仔の『荅溪漁隱叢話』、或は魏慶之の『詩人玉屑』等を我々が開いたとき、その多くが「正訛誤」の記事によって占められているからである。實事尊重主義、考證萬能主義は、歐陽脩以降、終息するどころか、ますます隆盛となっていったのである。

このように、實事尊重主義、考證萬能主義が一般化し、行過ぎとなったとき、いかなる弊害が起ったかは、容易に知れよう。

まず、文藝批評史の立場からこれを見れば本來なら詩その

もののあり方や、詩表現のあり方等を主として考究すべき文藝批評の場で、それらを全く閉却して、詩の内容が事實にあつていかどうかにのみ興味を抱き、その考證に腐心するという態度は、いわば本末顛倒と言える。それが、このように一般化したという事は、文藝批評の一ジャンルとしての詩話の、さまざまな進歩の可能性が制約された事を示し、それは、とりもなおさず、詩話を書く人々の意識が著しく制約された事を示すと言えよう。⁽³³⁾

批評者たちが、このような情況下にあつては、詩を作る人々も決して、こうした意識から自由であつたとは考えられない。

梅堯臣が述べたように、修辭を考慮しながら、實景が目前にあるように表現しようとしているうちは、まだ問題はないが、それが極端に走ったとき、事態は容易ならざるものとなる。

すなわち、こうした考えを一步進めれば、表現技術等は一切ないがしろにして、ただ事實をありのままに記せば事足りりという安易な考えを生み出すことになる。さらに、このように詩句内容を實事に合致させることだけを喧しく言うことによって、本來自由たるべき詩人の想像力は著しい掣肘を受

けることになる。

その結果、詩は實事のみをうたっているので解り易くはなつても、ややもすれば無味乾燥となり、ついには千篇一律の感すら生じせしめる。勿論、他にも理由があるろうが、宋代が、「詩話興つて、詩滅ぶ」と後世の人々に言われたのも、このような實事萬能主義が一般化、極端化した事に、大きな原因があると言えるのではないだろうか。

以上のように、歐陽脩の「理」「義理」尊重は、語としては、歴代の文學論の流れを受け継ぎながらも、その「理」の不通とは、單に詩句内容が實事と一致しているか否かという、語から受ける今日の印象とは裏腹な、形而下の内容を示していた。しかも、こうした「理通」萬能主義を繼承、増幅する形で宋代詩話が發達し、やがて詩そのものよりも、詩内容と實事とが合致しているか否かという事にのみ興味を示す者をも多數生ずるに至り、ついには、詩話が詩を滅ぼしたとの評を受ける原因の一つともなった。

しかし、これは歐陽脩の方法に原因がありはしても、その全ての責任を彼ひとりに押付けることはできない。それは、むしろその方法を繼承した側にあるのであって、自身は、し

ばしば著作の中で繰り返しているように、好んで異を唱える事に意があつたのではなく、批判(批評)の對象が、彼の考える理にあまりにそむくがために、その非を證明しようとするのであろう。

思えば、歐陽脩の時代は、どの分野においても、前時代的なものが多數を占める時代であつた。經説においては、彼の語を借りれば、怪異、妖妄の説が多く、文學においては、西崑體を中心とする美文が流行して⁽³⁶⁾いた。この状況を「正そう」と努めたあらわれが、今迄見た彼の考えであり、批判(批評)の方法だったのであろう。

その結果、確かに舊來の言説や方法及び方法論は、しばしば變更を餘儀無くされ、彼の言う「義理」「理」の通じたものが、多くを占めるに至つたと言つて良い。しかし、そうした方法の流行と權威化は——それがいわば「理通」への執着とも言うべき知的エネルギーに支えられていただけに——恐らく彼自身の豫想を越えた、方法自體の肥大と自己目的化をも生み出していったわけである。

〔注〕

(1) 廣義の詩話には、梁の『文心雕龍』や『詩品』、晩唐の『本

中國詩文論叢『第二集』

「事詩」なども含め得るが、「詩話」の名のもとに詩を論じた狭義の「詩話」は、歐陽脩の『詩話』が最初と考えられている。

歐陽脩の『詩話』には、『六一詩話』『六一居士詩話』『歐公詩話』等の別稱が存するが、小稿では、元版『歐陽文忠公集』（四部叢刊所收）収載のものに従い、単に『詩話』と稱することとした。なお、小稿で引用した諸本は、特にことわりの無い限り四部叢刊本を使用した。

- (2) 青木正兒『支那文學思想史』（春秋社刊、『青木正兒全集』卷二、六十七頁）。古くは、南宋の胡仔『苕溪漁隱叢話』後集・卷十五に、その後の論議をも収録した「半夜鐘」という條が見える。

- (3) 六臣注『文選』（以下『文選』）というのはいはべてこれである）卷五十二。

- (4) 『文選』卷十七。陸機はまた同じく「文賦」で「或辭害而理比、或言順義妨。離之則雙美、合之則兩傷」と述べ、「辭」「理」のバランスをとるべき事を説いている。

- (5) 『太平御覽』卷五八六引用。

- (6) 『文心雕龍』では、この他「理、鬱者、苦貧、辭溺者、傷亂」、(卷六・神思)と「理」「辭」の關係が述べられているのをはじめとして、「理」に關する記述が多く見られ、この點からも大變興味深い。

- (7) 藝文印書館本『歷代詩話』一。

- (8) 中華書局本『二十四史』（以下、二十四史は、このテキストに據った）。

- (9) 『顏氏家訓』では、このほか「文章當以理、致爲心胸」（文章篇）とも述べられている。

- (10) 従って「辭」「文」を修辭、すなわち外面を示すものと見るならば、それに對する「理」は内容を示すものと考えられるが、各時代の用例について、より詳細な検討を経たうえで、ないと確言し難い。後日、この點を考えることとしたいが、ここでは、兩者の關係を指摘するにとどめたい。

- (11) 『歐陽文忠公集』『新唐書』『新五代史』『詩本義』等。

- (12) 後述。

- (13) 『莊子』内篇「齊物論」に見える。蜘蛛はムカデ、帯は小蛇であるという。

- (14) 現存するテキストは、明版『毛詩本義』（靜嘉堂文庫所藏）、傳宋刊『詩本義』（四部叢刊所收）、通志堂經解本『詩本義』（清・納蘭成德編）がある。小稿では四部叢刊本を使用した。

- (15) 長くなるが、彼の論の進め方を見るため、原文を載せておく。「若序言關雎之應、乃是關雎化行天下、太平有瑞麟出而爲應、不惟怪妄不經、且與詩意不類。（中略）故前儒爲毛鄭學者、自學其非。乃爲曲說云、實無麟應、太師編詩之時、假設此義、以謂關雎之化宜有麟出。故借此麟趾之篇列於最後、使

若化成而麟至爾。然則序之所述、乃非詩人作詩之本意、是太師編詩假設義也。毛鄭遂執序意以解詩、是以太師假說義、解詩人之本義、宜其失之遠也。如毛言、麟以足至者。鄭謂、角端有肉示有武而不用者、尤爲衍說」

- (16) 彼の學術史觀を示す著述として最も良くまとまっているのは『新唐書』藝文志序であろう。しかし、これは、あくまで正史の藝文志の序にふさわしいものであって、その生の學術史觀を述べたものとは見爲し難い。小稿では、この點を勘案し、全集に見える學術史觀をぬき出すこととした。なお詳細は、藝文志序と小稿引用のものとを對照の上、検討いただきたい。

(17) 居士集卷四十七・問進士策四首其二。

- (18) 以下は、奏議集卷十六「論刪去九經正義中讖緯劄子」に見える評語。

(19) 『詩本義』卷五、曹風「候人」等、同書中、しばしば見える語。このほか、『歸田錄』で「打」字に關する考證を行なった條でも、「徧檢字書」と述べているが、著作中、歐陽脩は自らの考證の博大さを稱することが實に多い。新興の意氣に燃える宋代知識人の自信のしからしむるところであろうか。

(20) 後に詳細に述べることにしたい。

- (21) 『四庫全書總目提要』(臺灣商務印書館本) 卷一、毛詩本義に對する紀昀の評語。

歐陽脩の文學論における「理」(増子)

(22) 本田濟「理とは何か」(大修館刊・中國文化叢書二、思想概論) 參照。

(23) 歐陽脩の引用した詩二首は、ともに孟郊の詩である。今、彼の引いた詩を參考のため全文載せておきたい。傍點が『詩話』で引かれた句である。(二首はともに『孟東野詩集』卷九に收められている)。

借車(『詩話』では移居詩)

借車載家具、家具少於車、借車莫彈指、貧窮何足嘆、百年徒校走、萬事盡隨花

答友人贈炭(『詩話』では謝人惠炭)

青山白屋有仁人、贈炭價重雙鳥銀、驅欲坐上千重寒、燒出爐中一片重、吹霞弄日光不定、暖得曲身成直身、

(24) 宋人のこうした傾向について吉川幸次郎氏は「すなわち『經』への復歸の倫理によれば、文字は事實を記す爲にあるのであり、架空のことを記すものではない。少くともそう意識される」(『近世支那の倫理思想』筑摩書房刊『吉川幸次郎全集』卷十三、五六六頁)と述べておられる。

(26) 胡仔『茗溪漁隱叢話』前集(中華書局本) 卷十五。

(27) 『石林詩話』(上)(『歷代詩話』七)

(28) 『困學紀聞』卷三・毛詩。

(29) 莫伯驥『五十萬卷樓藏書目初篇』に引く『水曹清暇錄』の考證。

(30) 『五十高卷樓藏書目初篇』の莫伯驥の評。

(31) 『苕溪漁隱叢話』や、南宋・魏慶之の『詩人玉屑』にも數例見られる。先に見た梅堯臣の「豚魚詩」も論議の對象となつてゐる。

(32) 『歷代詩話』七。

(33) 確かに、歐陽脩をはじめとする大部分の詩話の作者たちが、そこでまとまつた文學理論や作家論、作品論を展開する意志は無く、せいぜい「閑談の資」(『詩話』の冒頭の語)程度の意識でこれを書いていたことは、これら詩話を讀めば分明であろう。従つて、詩話の可能性が制約されたのは、まずこの點に第一の原因が存するとの考え方も成立しよう。しかし、詩話がたとえ「閑談の資」という決して高からざる位置におかれていても、そこには、彼らの詩に對する意識があらわれていることは否めない。その意識が一つの方向に固定化、固着化されることが少なければ、そのあらわれである詩話も、さまざまに變り得る可能性も生ずる。それが、このように意識が著しく固定化、固着化されたから、こう言うのである。

(34) もっとも、當時の大部分の批評者は同時に詩作者であつたが。

(35) 『詩本義』中、しばしば見える語。事實、同書が、後世、古注批判の書として評價されていると言つても、古注の解釋

が「理」の通じたものであると認めた場合、これに従つてゐる。

(36) 歐陽脩自身が、批判の對象として、西崑體の名を直接あげることとはほとんどない。しかし、その意があつたことは著作中、十分くみとることができる。『白石詩話』(H)でも、この點を指摘して「歐陽文忠公詩話、始矯西崑體」と述べられてゐる。